



## JASTJ 30周年を迎えて

室山 哲也

1994年7月1日、JASTJは誕生しました。オウム真理教による松本サリン事件が発生した直後で、私は、「クローズアップ現代」のプロデューサーとして、この不可思議な事件を追っていました。あれから30年。時の流れは早いものです。会員の皆様も、この30年の歴史の長さを実感されているのではないのでしょうか。

さて、JASTJの会報第一号には、設立の趣旨として「孤立しがちな、新聞、放送、出版などの企業に属する科学ジャーナリストに、組織を超えた交流の枠組みを作る」「世界各国の同じ分野で活躍するジャーナリストとのつながりをもっと密接なものにする」(岸田純之助会長)とあります。複雑化する社会の中で、新しい科学ジャーナリズムを生み出そうという、先輩たちの気概を感じます。

この30年の間にJASTJは、様々な事件や出来事に向き合いました。大きな変化のひとつに、ネットメディアの出現で、新聞、出版、テレビなど、いわゆる既存マスコミの存在感が低下し、メディアの敷居が下がってきたことがあげられます。

近年、インターネット上では、新聞やテレビで流されるのと同じ情報が駆け巡り、生成AI(人工知能)を使えば、自動的に情報を作り出せるまでになっています。その結果、ジャーナリズムの世界も、大きく変質しはじめています。

この動きの中で、JASTJは、今後の社会に、どのように向き合えばいいのでしょうか? 私は、JASTJ設立時の精神が、再び重要な時代になっているのではと思います。

AIについて取材を進める中、生成AIと人間の言葉の

違いを説明する「接地記号問題」という考え方に出会いました。私たちの言葉は、身体(リアル)に接地して育つ。例えば、ヘレン・ケラーが「水」という言葉を学ぶ時、手に注がれる水の冷たさや、飲んだ時の、あの充足感とともに、記号としての「水」を学び、そこを起点として、言葉の体系が、豊かに育つのだというのです。

これに対して、生成AIの言葉は、身体を持たないため、リアルと接触しない、空中でぐるぐる回り増殖していく「記号のメリーゴーランド」だと説明されています。このことは、私たちに、取材の重要性を示しています。

私たちは、自ら現場に向いて、一次情報に触れ、その実感や質感を伝えます。その後、情報は二次、三次と加工されていきますが、その情報が、どこからどのように生み出されたものが重要です。「取材は足で稼げ」といいますが、情報を情報たらしめている原点を忘れてはいけないのではないのでしょうか。

今、ネット上では、生成AIによるフェイク情報やフェイク画像が急増しています。今後は、「情報」の真偽を見極める目や、情報の由来を確認することが、ますます重要になっていくと思われます。そしてそれは、私たち人間が納得できる「リアル」な感覚に根差したものでなければなりません。

激変する社会の中でも、私たちは、新しいテクノロジーを積極的に取り入れつつも、コミュニケーションの原点を忘れず、進んでいきたいものです。そして物事を中心に、いつも人間がいることを忘れない、温かい組織であり続けることが大切だと、最近よく思います。(JASTJ会長)

### CONTENTS

巻頭言	1
総会報告	2
ニュース	
科学ジャーナリスト賞2024 受賞者決定	4
科学ジャーナリスト賞2024 講評	5
特集 JASTJ設立30周年	
30年の歩みから読みとりたい「人と時代」	8
記念パーティー開催、記念誌編集者募集など	9

例会報告(2月) ノーベル賞級の高純度単結晶	10
例会報告(2月) プロの技をAIで誰でも利用	11
例会報告(3月) ゲームチェンジが起きている宇宙開発	12
例会報告(4月) AIと心の問題	13
オピニオン/賛助会員・団体	14
理事会から/賛助会員・団体	15
事務局だより/新入会員/会員のBOOKS	16

## オンライン併用で開催

日本科学技術ジャーナリスト会議の2024年度総会を5月16日に日本プレスセンタービルで開催した。オンライン併用のハイブリッド方式での開催だった。

正会員の21人が会場出席、11人（総会開始時）がオンライン出席し、議長委任の42人、事前の議決権行使3人と合わせて77人となり、定足数（正会員222人の5分の1以上）を満たした。23年度活動報告と決算報告、24年度事業計画と予算案、理事・監事選任の各議案について、会長と各委員長、塾長らが説明。質疑応答の後、すべての議案が承認された。

冒頭に室山哲也会長は月例会や塾など活動が充実した1年だったと話した。24年度はJASTJ創立30周年を迎えるが、メディア環境が変容するなか、過去を振り返りつつ未来を見据えた活動を展開していくと方向性を示した。（事務局長 滝順一）

### ■月例会などの開催（倉澤治雄・企画委員長）

月例会は分野のバランスに配慮して開いてきた。参加者増を狙いオンラインのURLを会員全員に配布するようにした。夏の見学会で日本科学未来館を訪問し浅川智恵子館長らと有意義な意見交換ができた。

月例会参加者を増やし会員外にどうリーチするかが課題とした。生成AI（人工知能）など進展の早いテーマについて通例の月例会とは別にシリーズ化した勉強会を検討する。

### ■科学ジャーナリスト塾（高橋真理子・塾長）

第21期科学ジャーナリスト塾は前期と同様に録画講義とライブzoom講義を組み合わせたカリキュラムで23年9月から24年2月まで開講。取材実習に国立天文台を訪問した。塾生25人のうち12人が作品を提出し修了証書を受け取った。第22期は24年9月に開講予定。取材実習は国立極地研究所を予定している。

### ■会報・ウェブなどによる情報発信（瀧澤美奈子・編集広報委員長）

昨年（2023年）6月から瀧澤が会報編集長を務め会報を4回発行した。編集会議を毎回開催し意見を集め役割分担をしながら進めた。SNSへの発信は例年通りだが、



より有効な活用が課題だと考えている。月例会などへの参加者を増やすため情報発信力を強める必要がある。

### ■科学ジャーナリスト賞（滝順一・事務局長）

元村有希子委員長に代わり事務局長が説明した。科学ジャーナリスト賞2024は最終選考会を4月13日に開催し大賞1作品、優秀賞3作品を選んだ。外部選考委員が村上陽一郎氏から小林傳司氏に交代した。6月8日に贈呈式を開催する。応募総数は62作品だった。24年度も7月から募集を開始する。

### ■国際活動（小出重幸・国際委員長）

世界科学ジャーナリスト連盟の役員改選がありインドネシアのハリー・スルジャディ氏が会長に就任した。23年3月に連盟の年次総会（コロンビア）で積み残しになった会計報告や予算案などをオンラインで採択する予定。シンガポールでアジア地域の科学ジャーナリスト会議開催が検討されており詳細は未定だが、JASTJとして協力をしたい。

### ■23年度決算と24年度予算（滝順一・事務局長）

23年度は正会員の新規入会が27人、退会者が10人で、年度末の会員数は217人となった。賛助会員は海洋研究開発機構、高エネルギー加速器研究機構、実中研、東京サラヤ、阪大微生物病研究会、物質・材料研究機構の6団体が新たに加わる一方、3団体が退会した。収入は5,622,887円と予算（530万円）を上回ったが、月例会の開催回数を増やすなど積極的な活動の結果、支出も5,486,302円となり予算（530万円）を上回った。収支はほぼ均衡し136,585円の黒字となった。

24年度予算は30周年行事やアジア地域ジャーナリスト会議への協力などで支出増が予想される。会員増などで644万円の収入を見込んだ。

### ■理事・監事の選任

大江秀房、今野公美子理事が退任、井内千穂、寺沢和洋、宮野きぬステファニーの3氏を新理事に選任した。

### ■意見交換

月例会参加者を増やすのは、ネットで多様な情報発信がされており競合が激しく容易ではないとの指摘があった。予算案に関し正会員をどれくらい見込んでいくかの質問があった。「240人」との事務局長からの回答に対し、すべての会員に周知し勧誘に努めてもらう必要があるとの指摘があった。

総会後に開いた理事会で室山哲也氏の会長留任、各理事の担当を決めた。

2023年度 決算報告（単位は円） 報告期間 2023年4月～2024年3月

収入		支出	
前年度繰越金	3,859,104	費目	摘要
会費収入	2,292,000	事務局職員給与	743,960
	2,580,000	事務所家賃	1,075,952
会費小計	4,872,000	会議費	(総会、理事会等会議室借用) 129,791
その他の収入	44,175	交際費	(懇親会) 40,304
参加費(月例会、懇親会等)	44,175	備品・消耗品費	(文具、郵送代、OA機器等) 118,716
ジャーナリスト塾会費	530,986	通信費	(電話、メール管理料) 146,347
寄付	120,000	支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB) 72,215
雑収入	55,711	源泉徴収税	(講師料など) 82,541
利子	15	事務局総務委員会予備費	(会計作業費、総務関係費、交通費など) 61,916
		雑費	6,480
その他小計	750,887	管理関係小計	2,478,222
当年度収入合計	5,622,887	企画委員会(月例会)	(会場費、講師代等) 955,668
		企画委員会(ジャーナリスト塾)	(会場費、講師代等) 489,342
		編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費) 880,970
		国際委員会	(世界連盟会費等) 30,522
		科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等) 651,578
		委員会予備費	(特別プロジェクト費) -
		委員会小計	3,008,080
		当年度支出合計	5,486,302
		収支	136,585
		次年度繰越金	3,995,689

2024年度 予算計画（単位は円）

収入		支出	
前年度繰越金	3,995,689	費目	摘要
会費収入	2,880,000	事務局職員給与	700,000
	2,760,000	事務所家賃	1,200,000
会費小計	5,640,000	会議費	(総会、理事会等会議室借用) 60,000
その他の収入	100,000	交際費	(懇親会) 500,000
参加費(月例会、懇親会等)	100,000	備品・消耗品費	(文具、郵送代、OA機器等) 120,000
ジャーナリスト塾会費	500,000	通信費	(電話、メール管理料) 200,000
寄付	0	支払手数料	(振込手数料、ビジネスWEB) 70,000
雑収入	200,000	源泉徴収税	50,000
利子	0	事務局総務委員会予備費	(会計作業費、総務関係費、交通費など) 130,000
		30周年記念誌など	120,000
		管理関係小計	3,150,000
		企画委員会(月例会)	(会場費、講師代など) 800,000
		企画委員会(ジャーナリスト塾)	(会場費、講師代など) 500,000
		編集委員会	(4回会報発行分、HP運営費) 850,000
		国際委員会	(世界連盟会費等) 200,000
		科学ジャーナリスト賞委員会	(会場費、会議室借用、選考謝礼、書籍、郵送等) 600,000
		委員会予備費	各委員会予備費、特別プロジェクト費 120,000
		委員会小計	3,070,000
その他小計	800,000	当年度支出合計	6,220,000
当年度収入合計	6,440,000	収支	220,000
		次年度繰越金	4,215,689

2024年度の理事及び監事と主な担当

役職	氏名	主な担当
会長	室山哲也	企画委員長兼務(新)提案は全理事(基本)
副会長	柏野 裕美	総務(DX)、J塾、国際
	小出 重幸(新)	国際委員長、編集広報、企画
	高橋 真理子	J塾長、国際
	瀧澤 美奈子	編集広報委員長
事務局長	滝 順一	総務委員長、J賞
会報・Web編集長	瀧澤 美奈子	会報編集長
	縣 秀彦	企画
	飯島 裕一	J賞、企画(web)
	井内 千穂(新)	J塾、編集広報
	井上 能行	編集広報
	内城 喜貴	編集広報、企画(委員長代理)
	大池 淳一	J賞
	寺沢 和洋(新)	企画、J塾
	鴨志田 公男	編集広報、J賞
	倉澤 治雄	企画、(検証委員会)
佐々 義子	J賞	

役職	氏名	主な担当
理事	佐藤 年緒	総務、編集広報、(30周年検証委員会)
	高木 勲生	編集広報
	都丸 亜希子	J塾、編集広報、J賞、企画
	中道 徹	総務、J賞
	西野 博喜	J賞
	長谷川 聖治	国際、企画、総務
	藤田 貢崇	総務(システム)
	三井 誠	J賞
	宮野 きぬ(新)	企画、国際
	三輪 佳子	編集広報、企画、国際
	村松 秀	J賞、企画(web)
	元村 有希子	J賞委員長、企画(web)
	森 時彦	企画(委員長代理)、総務
山本 威一郎	総務	
監事	北村 行孝	佐藤 征夫
顧問	武部 俊一	牧野 賢治

注) 50音順。(新)は新任。各理事が所属する委員会は、企画、編集広報、科学ジャーナリスト賞(J賞)、国際、総務、J塾の6委員会体制。  
 (特記) \*会報製作体制(新) 会報編集長:瀧澤 会報デスク:鹿見島(会員) デスク業務を行う 会報編集委員会(編集方針や企画出し): 鴨志田、高木、佐藤、三輪、内城、井上+a



## 大賞にNHK「関東大震災」優秀賞は3作品

「科学ジャーナリスト賞2024」の最終選考会を4月13日に日本プレスセンターで開催し、「大賞」に「NHKスペシャル 映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間 前後編」を選んだ。大賞は2022年以来2年ぶり。優秀賞には下野新聞連載「アカガネのこえ 足尾銅山閉山50年」、日経BP書籍「1100日間の葛藤 新型コロナ・パンデミック 専門家たちの記録」、ウェブ記事「Yahoo!ニュースオリジナル特集 経口中絶薬に関する連載3回」の3作品を選んだ。

日本科学ジャーナリスト賞は優れた科学報道や著作、コミュニケーション活動などを顕彰するもので、今回が19回目。全部で62作品（新聞6、書籍30、映像20、博物館展示1、ウェブ5）の応募があり、最終選考では一次選考を通過した11作品（新聞3、書籍3、映像3、博物館展示1、ウェブ1）が選考対象となった。

NHKの「関東大震災」は、選考委員が事前に提出した評価点で他の作品からずぬけた高い評価を得ており、議論の早い段階で受賞が確定視された。ただ関東大震災を扱ったドキュメンタリー作品は過去にも数多くあることから、同じNHKの番組で最終選考に残った「フロンティア 人間の知能は作れるか～AI究極の知能への挑戦」を推す意見もあった。

政府の新型コロナウイルス対策分科会の会長を務めた尾身茂氏の著作も事前評価で高い点を得ていたが、「尾身氏の視点からの記録であって、新型コロナ・パンデミックの全体像を捉えてはいない」「尾身氏の著書を受賞させることで政府の新型コロナ対策を結果的に是認する印象を与えかねない」などの懸念も表明され、意見の応酬となった。

最終的に優秀賞に選んだのは、尾身氏が記したの

は同氏個人ではなく同氏を支えた専門家集団の考えや意見であること、さらにパンデミックの最中に専門家たちが話し合い、政府と渡り合った事柄を「記録」として次代に残そうとする尾身氏の姿勢にはジャーナリズムに通ずるものがあるとの評価の下で、選考委員の合意が生まれた。

下野新聞の「アカガネのこえ」は、足尾銅毒事件を風化させまいとする地元紙の記者の思いを高く評価する意見が選考会の大勢を占めた。原子力発電所事故後の福島にも取材し、ローカルな問題意識のうちにとどまらない報道姿勢に共感を覚えるとした声もあった。

ウェブ連載の「経口中絶薬」にも共感する意見が多かった。日本はジェンダー・ギャップ指数の比較において国際的にみて低位にあることがたびたび指摘されている。経口中絶薬の認可の遅れも、男性中心の社会で女性の性や生殖の問題が見過されてきたことの表れだといえる。高い問題意識の下、インパクトの大きな記事にまとめた取材力に敬意を表する意見があった。

科学ジャーナリスト賞は、身の回りの自然に科学の目を向ける「市民科学」の顕彰も目的としている。奈良公園のコガネムシたちを展示する「ならまち糞虫館」が博物館展示作品として最終選考に残っていた。「特別賞に」との強い意見も出たが、受賞作品数は4つ以内とする枠の前に涙を飲んだ。

最後に、選考委員の全員一致で、NHKの「関東大震災」を大賞とすることを決めた。

多数の候補作を推薦していただいた皆さんと、一次選考、最終選考に携わっていただいた選考委員、会員の皆さんに改めてお礼を申し上げたい。

(事務局長 滝順一)

### 科学ジャーナリスト賞 2024 受賞作品

大賞	「NHKスペシャル 映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間 前後編」	チーフプロデューサー(制作当時): 木村春奈	映像
優秀賞	下野新聞連載「アカガネのこえ 足尾銅山閉山50年」	「アカガネのこえ」取材班	新聞
優秀賞	「1100日間の葛藤 新型コロナ・パンデミック 専門家たちの記録」	尾身茂	書籍
優秀賞	「Yahoo!ニュースオリジナル特集 経口中絶薬に関する連載3回」	古川雅子	ウェブ

選考委員 (敬称略) 【有識者委員】相澤益男、浅島誠、大隅典子、白川英樹、小林傳司  
【JASTJ委員】大池淳一、佐々義子、三井誠、村松秀、元村有希子 (委員長)

## 映像記録からウェブ連載まで授賞

「科学ジャーナリスト賞2024」の選考にあたった有識者委員に授賞作品の講評を書いていただいた。大賞の映像記録から初のウェブ連載記事まで授賞理由が解説されている。最終審査会では科学コミュニケーションに関わる様々な主体による多様な作品に注目していくことで議論が盛り上がった。

### 全体講評

### J賞とは何かでも熱い議論

大隅 典子

日比谷公園の桜がそろそろ散りかけ…といううらかな日に、日本プレスセンターの会議室にて科学ジャーナリスト賞(J賞)の最終審査会が開かれた。コロナ禍に審査員となった筆者にとって、全員が一堂に介した機会に参加したのは初めて。対面ならではの白熱した議論は、2時間以上に及んだ。今回、一次選考を通過したのは映像、書籍、新聞が各3作品、加えてウェブ1作品と展示1館であったが、結果として映像、書籍、新聞、ウェブの1作品ずつがJ賞に選ばれた。

大賞に選ばれた映像作品『映像記録 関東大震災 帝都壊滅の三日間』は、関東大震災から100年を機に、最先端の高精細化・カラー化技術を駆使してNHKが制作。元旦に能登半島地震が生じ、輪島の朝市通りが全焼した今年、改めて見直すと多くの気づきがある。多くの審査員の「推し」に恵まれたが、映像制作の専門家からの別の視点や、地方テレビ局の奮闘についての熱い支持もあった。

書籍の受賞作を選ぶ過程で、J賞とは、どのような賞なのかについて、改めて議論が盛り上がった。科学を伝えるジャーナリストの・による・ための賞というだけでなく、科学コミュニケーションを行う様々な主体による作品も候補となる。また、今回、受賞した『経口中絶薬に関する連載3回』について

は、その内容そのものについて以外に、「Yahoo!ニュース オリジナル特集」という新規の媒体に掲載されたウェブ作品であり、公開データを丁寧に調べて読み込むという、「足で稼ぐ」従来の取材と異なるアプローチについても話題となった。

昆虫好きの市民による私設博物館「ならまち糞虫館」については、「前年の業績」を審査対象とする点をどう考えるかに関する議論があったが、すでに4作品が選ばれてしまったこともあって選に漏れた。「映え」な展示をいつかは是非、訪れて見てみたい。(東北大学副学長、教授)

### 「NHK 関東大震災」講評

### 首都の防災考える貴重な映像記録

白川 英樹

2023年は1923年9月1日に発生した関東大震災から100年の節目に当たる。震源地は相模湾北西部だったが、人口密度が高い帝都東京にも壊滅的な被害をもたらした。その3日間にわたる首都東京での記録映像である。



国立映画アーカイブには関東大震災を記録した古い20本のモノクロフィルムが保存されていたが、いっどこで撮影したのか分からないものが多かった。

NHKは8Kによる高精細化とカラー化を図り、不鮮明だったモノクロフィルムに潜んでいた詳細を明らかにした。

地割れが起きた東京の町を逃げ惑う人々の表情は生々しく、ぼやけていた看板の文字や倒壊した家屋の様子を鮮明に再生することに成功した。一カットずつ場所と時間を特定し、場所が判明したフィルムは当事者の証言とともに東京の地図に記して、悪化していく被災の状況を時系列でまとめた。

家財道具を山ほど積んだ大八車や布団を背負って



逃げる人々が狭い道路を塞いだために人々の避難の妨げになっている様子も克明に撮影されていた。ラジオ放送がまだなかった時代だったので、必要な情報は人々が自分の目で見て得るだけだった。四方を火災で囲まれているのに、遠く離れた浅草の火災だけしか目に入らないのでのんびりと構えている人々の表情も写っている。一方で、情報が少ない被災地では爆発的に広がった流言飛語に惑わされて多くの悲惨な殺害事件が起こった。

陸軍被服廠跡を襲った巨大な火災旋風や各所に火災を広げた飛び火火災の発生原因を探る綿密な再現実験を交えており、大震災直後の東京の被災状況を解明した貴重な遺産といえる映像作品である。同時に、これから起こる確率が高い首都直下地震や南海トラフ地震への防災について、我がこととして考えを促す上で有効な番組である。(筑波大学名誉教授)

「尾身茂 1100日間の葛藤」講評

## 専門家の集合知と活動を浮き彫りに

相澤 益男

新型コロナウイルス・パンデミックが世界を席捲。日本政府は、専門家会議と連携し、新型コロナ対策を展開した。その真っ只中でリーダー役を務めた新型コロナ対策分科会会長が、当事者の視点から、専門家たちの葛藤を赤裸々に綴った。このタイミングで、コロナ禍の3年間を振り返り、全体像を浮き彫りにした意義は大きい。本書は、多様な専門家たちの献身的な活動の実態を知る上で、極めて貴重な記録であり、高く評価される。

「このウイルスは私が直接対策に関与した中で最もくせ者だった。だからこそ視点や価値観の異なる専門家同士の勉強会が必須だった」と、著者は言い切る。まったくそうだと思う。もとよりウイルスには人類よりも遥かに長い進化の歴史があり、その生存戦略はしたたかである。特に、COVID-19の特徴は爆発的な変異だ。限られた専門家たちだけでは手に負える



相手ではない。「唯一絶対の正解のない中で、私たち専門家はもがき続けてきた」というのもうなづける。

こうした葛藤を克服しつつ、対策分科会はコロナ禍の3年間で100を超える提言を政府に提出した。多様な専門家の集合知が次々と提言を生み出したもので、驚くべき成果に敬意を表したい。そもそも専門家の役割は、感染リスクの分析・評価を基に、政府に対策を提言することに併せて、政府からの諮問に意見を具申することである。一方、政府の役割は、専門家の提言の採否を判断し、対策を実行することだ。今後、コロナ対策全般にわたる評価の際には、この役割分担に留意することを求めている。

ところで、リスクコミュニケーションは政府の役割であるが、分科会も関わらざるを得なかったのではないか。「感染が長期に及ぶと、人々の立場や価値観にこの感染症に社会としていかに対処するかなどの点で共通の理解が得られにくくなった」という。次のパンデミックに向けて、多様な専門家の集合知を創り出すことに加えて、社会との共創的リスクコミュニケーションが構築されることを期待する。

(科学技術国際交流センター会長)

「下野新聞 足尾銅山閉山50年」講評

## 福島原発事故とも重なる視点

浅島 誠

足尾銅山の開発に伴って起きた日本で最初の大規模な鉱毒事件により1973(昭和48)年に銅山は閉山した。その後50年間という時の流れと足尾銅山の事件で埋もれていた事柄も見出し、社会や地元住民、関係企業がどのように変化しているかを丁寧に描いている。

銅山開発は明治政府の富国政策と日本の近代化に大きく関わり、企業城下町として繁栄したが閉山後、鉱都足尾は過疎が急速に進み衰退し、環境破壊とその後処理の難しさが浮き彫りとなっている。銅山開発と精錬から出た様々な有害物質が渡良瀬川河川敷



を通して甚大な公害をもたらした。

閉山して半世紀がちょうど経った節目にこの特集を企画したことは地元紙だからこそできたことで、足尾銅山の光と影に照準を合わせて社会的啓発をしたことにおいて大きな意義がある。鉱毒事件という社会的にも大きな問題と影響を与えた公害事件であったとしても、時間の経過とともに私たちの記憶から消えゆく中で、地元の方々の声を丁寧に聴きとり連載記事としてまとめ上げている。また大規模な鉱毒事件となるまでの経緯と、企業や国などの対応は、まさに水俣病や福島第一原発事故と多くのところで重なっているという視点で取材している。

さらに、銅山開発に伴って起きた亜硫酸ガスによる煙害の旧松木村の廃村、水面下に沈んだ旧谷中村の強制廃村、その被害者たちが追いやられた北海道の北端の佐呂間町の「栃木地区」などの住民の苦悩と現状も取り上げている。足尾銅山での公害問題に真正面から取り組んだ田中正造の「真の文明とは」が思いおこされ、今後の社会への警鐘にもなっている。

半世紀たった今でも、抗排水は、閉山し採掘をやめても出続ける。処理を怠れば渡良瀬川流域に再び甚大な被害を及ぼしかねず、半永久的な管理が必要だという。「負の遺産と生きていかなければならない」という言葉は重い。その中で「精錬所跡の国指定」、「足尾銅山観光」改修、渡良瀬川渓谷鉄道、「足尾に緑を育てる会」など地域活動も続けられている。

現代社会で起きている企業や国などの論議が優先し、そこに生活する人々がとかく軽視されている社会のあり方について再考する意義深い連載になっている。(東京大学名誉教授)

「Yahoo! 経口中絶薬連載」講評

## ジェンダー問題に一石投じる

小林 傳司

この連載記事が取り上げる事例は、各種のジェンダー指数で芳しくない順位を記録し続ける日本を象徴している。

日本では経口中絶薬の承認が世界で初めて承認されてから35年も遅れた(2023年4月)がそれはなぜだろうか、というのがこの記事の問題意識である。「産婦人科医会」の「常務理事会の主なる協議・

報告事項」を30年にわたって調べ、医師や厚生労働省の官僚、さらには産婦人科医の政治団体である「日本産婦人科医師連盟」などへの丹念なインタビューと資料分析を通じて、産婦人科医の収入源としての搔爬、墮胎罪、優生保護法、母体保護法、配偶者の同意などの問題にたどり着き、日本社会の根深い女性差別体質を浮かび上がらせている。この問題に関与した日本の製薬会社社員、産婦人科医師、政治家の多くが男性であり、積極的な反対の論陣が張られたわけではないまま、一種の「空気」のようなものによって承認が遅れていったことがわかる。バイオグラの承認は半年で実現したが、避妊用ピルの承認には10年近くかかった事例なども同様といえよう。

しかしこのような事例は日本だけのことではない。海外でも、顔認識システムに潜むジェンダーシェードについてその告発を行ったのが有色の女性研究者であったことから明らかなように、技術の開発や実装、制度の設計に女性が当事者として参加していないことが問題の根っこにあるといえよう。ジェンダードイノベーションやフェムテックの議論により注目が集まり始めている時期だけに、この記事の重要性を強調したい。

それにしても、未だに女性だけに適用される墮胎罪が存在している国に暮らしているのかと思うと、暗澹(あんたん)たる気分になる。

なお、この記事はインターネットで配信されたものである。科学ジャーナリスト賞がネット配信された記事に贈賞される最初の例である。すでにメディアとして、インターネットの影響力は極めて大きいものになっており、科学ジャーナリスト賞の選考に際して無視しえない。その際、従来の新聞、雑誌を中心とした活字メディアとやや異なる文体や構成のネット記事をどのように評価していくかは、本賞の今後の課題と考えている。

ともあれ、日本の大きな課題であるジェンダー問題に重要な一石を投じる記事であったことを高く評価したい。(大阪大学名誉教授)





## 特集◆JASTJ 設立30周年

# JASTJの歩みから読みとりたい「人と時代」

## —あなたにとっての30年は?—

今年の7月1日は、JASTJが設立されてから30年に当たる記念の日。30年前のこの時期、みなさんは何をされていたでしょうか。まだこの世に生まれていなかった20代の会員もいるかもしれません。30年と言わずとも「10年ひと昔」。歴史時計の針を少しだけ戻して、科学・技術をめぐる時代の変化と人々の思いを振り返ってみませんか。歴史的に俯瞰することで、初めて未来への展望が開けるのではないのでしょうか。今年度は一年を通して「これまでの歩みとこれから」を考えませんか。(理事 佐藤年緒)

### ● 世界とのつながりがスタートに

会発足の原点は「世界で活躍するジャーナリストとのつながり」。契機は1992年11月に東京で開いた初の科学ジャーナリスト世界会議だった。ユネスコ(国連教育科学文化機関)の呼びかけで、国内の科学記者らが会社組織を越えて集まり、組織委員会を発足させてプログラムを作成し、資金を集め、31カ国から165人が参加した。

ブラジル・リオデジャネイロで開催された地球サミットの半年後だけに、地球環境問題やエイズに象徴される医療報道など、世界共通の課題に科学技術は貢献できるかが大きな主題。日本の科学メディア関係者が初めて顔を揃え、互いに抱える課題を出し合ったことが組織を越えた連携のきっかけになった。世界大会の終了後、折角できたそのつながりを生かそうと誕生したのがJASTJである。

### ● 「月例会」に加えて「賞」や「塾」

講師を招いての月例会が会の中心的な活動であることはいと変わらない。第1回は1994年10月、米澤富美子さんによる複雑系物理の講話で始まった。新聞、放送界の科学記者の大御所が、第一線の科学者から真剣に学ぼうとしている姿勢は、当時若造だった筆者からみてとても新鮮であった。

2003年に会員対象を科学コミュニケーターにも広げ、会費を半額にし、若手や中堅世代にも加わりやすい環境を整えるなど、牧野賢治会長(2代目)の下で大改革を行った。その前年から、科学ジャーナリストや科学コミュニケーターの養成のための講座「科学ジャーナリスト塾」の活動も開始し、参加の輪を広げている。さらに科学技術に関する報道や出版、映像などの分野で優れた成果をあげた個人を顕彰する「科学ジャーナリスト賞」も2006年に始め、現在に至っている。

設立の発端になった世界会議は、その後、第2回が1999年にブダペストで、第3回が2002年にブラジルで開かれ、各国の科学ジャーナリスト団体をつなぐ「世界科学ジャーナリスト連盟」(WFSJ)も誕生した。定期的に行われた世界大会にはJASTJからも毎回会員が参加。新型コロナ禍で延期のときもあったが、アジア地域での科学ジャーナリストとの研修や交流も進めてきた。

### ● 30年の活動記録

JASTJ30年間の活動内容は、会報『JASTJ NEWS』が貴重な記録となっており、これまで今号を含めて111号が発行された。100号を記念して2021年10月、JASTJの歴史を振り返る対談(ZOOM井戸端会議座談)が、初代編集長を務めた武部俊一氏(第4代会長)と牧野賢治氏(第2代会長)との間で行われ、設立前史のこぼれ話も載せられている(「会報101号」同年12月号)。

対談ページにJASTJの簡単な活動年表が添えられている。さらに詳しい歴史年表はJASTJのホームページ(HP)の「沿革」(<https://jastj.jp/history/>)で紹介している。これらの年表に記された活動は、会員内部の熱意や努力だけでなく、内外の関係者の理解や協力、応援に負う所が大である。社会の出来事や事件、経済の変動、技術の進展などの環境の変化にも大きく左右され、それだけ戸惑いや奮闘の跡もうかがえる。

発足翌年の1995年には、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、もんじゅのナトリウム漏れ事故が発生。科学・技術に対する信頼を揺るがす3つの出来事が重なる忘れられない年になった。1999年には臓器移植法にもとづく初の臓器移植が実施され、JCO東海事業所で臨界事故が発生した。

行政改革による中央省庁の再編で、2001年文部省と科学技術庁が文部科学省に統合されたことも、科

学政策を伝えてきた記者や科学コミュニケーションの仕事をする個人に影響を与えたと言えただろう。宇宙や原子力の政策を担っていた科学技術庁の記者クラブも消滅。国家戦略重視の科学政策が進み、生活・文化、教育があいまいにされてきたようにみえる。科学のジャーナリズムやコミュニケーションの意義を理解し、役割を担うことがますますJASTJに求められるようになった。

とはいえ東日本大震災をもたらした大地震と東京電力の福島第一原発事故、そして新型コロナ感染によるパンデミックでの経験は、科学をどう伝えるか、科学と社会をめぐる課題にまだ結論を見つけれないままに、今日に至ったと受け止めている。

### ● 先人に学ぶ

会発足時の会員は53人、準会員12人、賛助会員2社。会報の創刊号(1994年12月号)に掲載されている会員名簿には、所属や電話、FAX、自宅住所まで記されている。個人情報取り扱いが厳しくなった今では考えられない伝え方であるが、発足時には、会員同士の顔が見え、親密なつながりをつくろうとす

### 記念パーティーを開催、メッセージも募集

30周年記念パーティーは7月1日(月)午後7時から9時まで千代田区内幸町の日本プレスセンタービル10階で開かれます。30周年を機にJASTJへのメッセージを募っています。

30周年記念パーティーサイト(<https://cpk.jp/conference/17/30th-party>)からふるってお寄せください。



↑  
詳しくはこちらまで

### 30周年記念誌の編集メンバーを募集!

—検証プロジェクトとして活動します—

JASTJ設立30周年を記念して、これまでの活動の歩みを振り返り、会に学んだこと、体験したこと、反省すべきこと、次世代に伝えたいことなどの見解や論考、声などを記念誌にまとめます。JASTJのホームページ(HP)のほか可能な範囲で印刷物として刊行する計画です。

JASTJでは会員の自主的な活動の場として「なんでも検証プロジェクト」が用意されていますので、その一環として「30年の歴史検証」をテーマに実施します。関係する先人たちの取り組み、歩んだ道程、活動について、インタビューしたり、残されている資料(書籍、会報、HP記事など)を読み直したりし、記録や記事にまとめる活動を行います。

参加希望者は、担当の佐藤年緒(メールアドレス: [sttoshi@gmail.com](mailto:sttoshi@gmail.com))にご連絡ください。

る願いがあったのだろう。

初代編集長の武部さんによると、この当初会員53人のうち、既に鬼籍に入られ方は16人だという。設立期の岸田純之助会長、浅井恒雄事務局長をはじめ、JASTJの発展にかかわった小出五郎理事、柴田鉄治理事らも鬼籍に入られた。戦前・戦中に生まれ、空襲や飢えなどの戦争体験をされた世代でもあり、原子力政策に一家言を持ち核廃絶を願う信念のジャーナリストたちであった。

科学ジャーナリスト賞の選考委員を務めていただいた米澤富美子さん、北澤宏一さんも旅立たれた。さらに活動にかかわってきた会員の訃報も断片的に寄せられたり、消息がつかめなかったりする人もいる。

先人や仲間を想うことは、会の活動を継承し、新しい歩みに向かううえで必要なことだろう。最近、コロナ感染に伴う社会情勢の変化で故人を追悼し、古きを温める習慣が日本社会から消えてしまったようで残念である。30年という一世代が交代する時間経過のなかで、会の歩みをしっかり振り返り、新たな方向を見いだしたいと願う。記念パーティーでの交流と記念誌での会員の健筆を期待したい。

### データで見る30年

#### 【会則の変更】

「正会員」にジャーナリストだけでなく、ライター、編集者、広報担当者、さらにサイエンスコミュニケーションに携わる科学者・技術者・研究者・産業界・行政官・市民も対象に拡大。広報担当者や研究者を対象にしていた「準会員」をなくす。(2003年)

#### 【会員数の推移】

会員53人(うち女性5人)、準会員12人(1994年)⇒110人を超す(2004年)⇒171人、賛助13社(2010年)⇒197人、賛助14社(2016年)⇒203人、賛助11社(2017年)⇒200人、賛助16社(2022年)⇒222人、賛助21法人・企業(2024年)

#### 【会費、事業費】

会費2万4000円(1994年)⇒1万2000円、地方会員・学生会員6000円、賛助会員12万円(一口)(2003年)年間事業支出は260万1518円(2003年度)⇒548万6302円(2023年度)

#### 【事務所の変遷】

事務所(日本プレスセンタービル)は、これまで計8回の引っ越しの末に落ち着いた。科学技術広報財団(港区赤坂から新橋に)⇒ジェイ・ピーアール内(千代田区九段北から港区北青山に)⇒武田計測先端財団(中央区明石町)⇒東京富山会館(文京区白山)⇒スタジオエル(渋谷区神山町)⇒東京理科大学内(新宿区神楽坂)⇒現事務所



## ノーベル賞級の高純度単結晶

偶然の産物だった六方晶窒化ホウ素の合成

量子コンピューターの実現などに欠かせない量子材料の高度化に向けて物質・材料研究機構の谷口尚理事は、その素材として注目される高純度の六方晶窒化ホウ素 (h-BN) の合成に成功した。「ノーベル賞級」ともいわれるこの研究成果は偶然の産物だったという。2月16日に日本プレスセンターで開かれた例会で話を聞いた。

### ダイヤモンドと窒化ホウ素

炭素 (C) の単体には、立体的にほかの4つの炭素と共有結合して正四面体の構造を取るダイヤモンドがよく知られている。ほかにも、他の3つの炭素と平面的に結合した正六角形の2次元原子層が重なった「黒鉛」や、同じ正六角形の構造であるものの層が1枚のみの「グラフェン」などがある。

窒化ホウ素の立方晶 (c-BN) と六方晶 (h-BN) は、それぞれダイヤモンド、グラフェンと同じ結晶構造をしている。ただ、炭素に比べて共有する電子が1つ多い窒素 (N) が1つ少ないホウ素 (B) に一方的に電子を渡す結合 (配位結合) をしているため、独自の性質を持っている。特に六方晶の高純度結晶は、グラフェンと重ねることによって本来の性質を引き出すことができる。ただ、現象の発見から実用化までを5段階で分けて考えると、今のところ研究は2～3段階目だという。

### セレンディピティに注目

谷口さんが開発して世界中の研究者に広がった高純度の六方晶は、立方晶を開発する過程でできた「偶然の産物」だった。谷口さんは、これを「セレンディピティ」と表現した。何かを探しているときに、偶然に価値あるものが見つかる幸運やそれを見つけ出す能力・才能の意味である。

谷口さんの研究所には超高压装置があり、それで作り出される人工ダイヤモンドの研究を進めている。無色透明の人工ダイヤモンドが作れるが、窒化ホウ素の立方晶 (c-BN) ではそれができなかった。そこで谷口さんは不純物を取り除くために、生成過程で使用する溶媒にバリウム (Ba) を使用したところ試料が透明になった。この研究に数年かけたと



谷口尚さん (瀧澤美奈子撮影)

いう。光の専門家である同僚の渡辺賢司さんにできた立方晶 (c-BN) を渡そうとしたところ、渡辺さんは試料の中にきれいな六方晶 (h-BN) があるのを見つけ、これも分析してみるといったそうだ。谷口さんは「それはc-BN (立方晶) じゃない、副産物だよ」と伝えたが、渡辺さんは持っていったという。後で渡辺さんから「変なことが起きている」と電話がかかってきた。普通の六方晶 (h-BN) は波長300nmを中心とする幅広い波長帯の光を放って白っぽい色を出す、215nmに強いピークを持つ光が出ていた。

### 試料提供で世界をつなぐ

この特性に世界の材料科学者が注目。谷口さんは六方晶 (h-BN) を世界中に提供するようになった。2010年から広まって、2018年には35カ国、300の研究グループにまで広がっている。すでに優れた研究成果が多く出ていて、谷口さんの下には様々な研究情報が返ってくるという

谷口さんの説明は、金太郎飴を例にするなど工夫されていて分かりやすかった。その説明の力が、研究成果が世界に広がった1つの要因ではないかと感じた。講演の間にも仲間の研究者の名前が多く出てきたのも印象的だった。おそらくこうしたところも、谷口さんの「セレンディピティ」の一つなのだろう。

(会員 小西一也)

## プロの技をAI使い誰でも気軽に利用

実用化目指す小池東工大教授に聞く

2月21日の例会では、東京工業大学情報理工学院の小池英樹教授をお迎えした。AI (人工知能) を含めた機械の力で人を鍛え、人間ができることを増やす「技能獲得支援」をテーマに、小池さんらの研究グループはそれらを実用化するシステム開発に取り組んでいる。情報工学の最前線で開発される技術の実装例や、今後の構想について議論が交わされた。

### スポーツから楽器演奏、リハビリまで

身体動作の計測技術を用い、「AIコーチングでスポーツがうまくなる！」とのキャッチフレーズを掲げる研究だが、スポーツ指導に限らず、音楽や伝統芸能、医療手術といった様々な応用を目指している。これらは経験や感覚を頼りに人から人へ伝えられてきたが、言語化・定量化が難しく、非科学的指導も存在する。そんな構造を変えようと、AIと協調した科学的指導を提供するのが狙いだという。

たとえばアルペンスキー。ユーザーの身体計測と正面ディスプレイの仮想空間に表示させた上級者のスキー動作を組み合わせて指導に活用できる。

ゴルフでは、クラブを振りかぶった自分のフォームに合わせ、熟練者のプレー映像から最適画像が自動的に選ばれ、リアルタイムで床上に投影されるシステムを紹介。「この練習法ならボールから目を離さずに自分のフォームを観測できる」と小池さん。

指導システムの基礎であるAIの深層学習では、データセットの量が精度を決める。収集するデータ



AIコーチングを使ったスキー滑走の訓練 (小池研究室提供)

を増やすため計測にかかる機器コストを低減させようと、従来品より廉価な「モーションキャプチャカメラ (人の体の動きをデジタル化し仮想空間上で再現する装置)」なども開発した。収集したデータやシステムは、アスリートなどの専門技能者が技能研さんに用いるほか、一般の人にも、健康増進をはじめ認知症予防への効果、リハビリ患者、高齢者の動作向上などの生活面に活用することを想定している。

### 技能伝承の「民主化」、ビジネスへ

一般人や専門家がこうした身体動作を気軽に計測し、そのデータを得たい他者に提供 (売買) する社会的な仕組みとして「技能データセンター構想」も掲げる。誰もが自身の技能を低コストに記録してクラウド上に公開し、利用希望者は対価を支払って公開された技能にアクセスすることを、小池さんは「技能の民主化」と表現、例会の質疑でも話題になった。

筆者は学生時代にスポーツとして馬術を学んだが、この構想が実現すれば、選択肢の多様化によって、プレーヤーの競争力をより向上させるのではないかと興味深く感じた。従来、能力や運の結果とされていた技能指導を受ける環境条件の違いは、機器やデータ購入という経済要素に置き換わる。システムは遠隔地でも利用でき、プラットフォームを通せば、縁故や信頼構築のためだけの労を必要とせず、指導可能な人数にも制限がない。広く一般人がデータを用いて技能向上を目指すという仕組みは、スポーツクラブなど技術指導産業にも変化を与えるかもしれない。社会的影響が大きく各分野で発展が望まれる研究だと受け止めた。

(第21期塾生 長島文香)



小池英樹さん (都丸亜希子撮影)



## ゲームチェンジが起きている宇宙開発

周回遅れの日本がすべきこと

「宇宙ベンチャーの父」と呼ばれる中須賀真一・東京大学大学院工学系研究科教授を講師に招いて3月例会が11日、東京都千代田区の日本記者クラブでハイブリッド方式で開かれた。演題は「宇宙開発利用の新しい潮流とビジネスの将来」で、中須賀さんは「宇宙開発の潮流は変わった。一つは、ベンチャー主導で技術開発が行われ、政府がお客になっていく。もう一つは、小型衛星コンステレーションである」と強調した。

### 今年は良いスタート

中須賀さんは「日本は今年に入ってから2連勝している。SLIM（小型月着陸実証機）が1月20日に月着陸に成功した。2月にはH3-2号機の打ち上げも成功した」と明るい話から講演を始めた。

「SLIMは衛星自体が170kgと小さく、燃料もあまり積めないのが、スイングバイなどを使って4カ月ぐらいかかった。アポロは3日ぐらいですけどね。この辺が日本の辛さでもあり、得意技でもある。SLIMは目標から55mぐらいの高い精度で着陸した」と意義を説明した。

「H3の成功、ホッとしました。昨年3月に失敗してから、国内の打ち上げは1機、一昨年はゼロなんです。これじゃあ、宇宙開発は進まない。スペースXだけで1年に50機。中国も1年に50～60機上げている」と差が大きいことを紹介した。

令和6年度は予算が8945億円と大きく増えた。「宇宙産業の官需率は92%。これが大きな課題です。国が1投資しても産業が1.1ぐらいいか起こらない。1投資したら外需や民需を獲得して、2とか3になってほしい」という。

### 技術の向上度 = (1+a)<sup>N</sup>

中須賀さんは打ち上げ回数を多くすることの重要性を技術の向上度の式で示した。「aは一回の実証でどれだけ技術の信頼度が向上するか。0.1だったり、0.5だったりする。難しい衛星を作ればaは大きくなるが、人手も時間もコストもかかる。結局、回数のNが減る。これが日本の宇宙開発だった」。それは日本の技術開発に共通する問題点のようでもある。



中須賀さんによると、スペースXが運営するスターリンクはaが0.001などと小さい。だが、もう90回ぐらいいち上げている。「打ち上げて、フィードバックして、を繰り返せば、あつと言う間に技術は上がる。Nをいかに増やすかが、非常に大事だ」と指摘した。「イーロン・マスクは『失敗していないとすれば、イノベーションを起こしていないことだ』と語っているが、本当にそうだと思う」と語った。そのうえで「失敗したら税金の無駄遣いではなく、次につながなければ技術は伸びていかない。メディアのみならず、報道する際はぜひ、この点を理解してほしい」と力を込めた。

日本の宇宙開発は周回遅れといわれるが、中須賀さんは頑張っている分野が二つあるとして情報収集衛星とはやぶさをあげた。共通点は、使う側が命を懸けて「この機能がほしい」と訴えて、工学側がそれに応えたことだという。「日本に技術力がないのではない。こういう分野を広げていかないとけない」と指摘した。

### 日本の有人宇宙飛行は？

講演後、「日本で有人宇宙飛行は」と質問が出た。中須賀さんは「有人が成り立つための条件の一つがある。実験している段階で必ず死人が出ると思う。出した時に、それを乗り越えられないのだったら、最初からやらない方がいい」と答えた。

情報収集衛星について「本当に成功しているのか」という質問もあった。中須賀さんは「技術は相当、育っています。評価されているので予算が付いているのです。これ以上はいえませんが、具体的な説明はしなかった。（理事 井上能行）」

## AIと心の問題

開発ゆっくり進め技術の価値を見極め

4月の例会は科学史・科学哲学が専門で、一貫して「心の哲学」を追求してきた信原幸弘東京大学名誉教授を講師に招き、AI（人工知能）が私たちの心の問題に与える影響について問題提起していただいた。信原さんは国の研究プロジェクト「人と情報のエコシステム」のアドバイザーを務め、AIのELSI（社会的受容）プラットフォームの構築を実践している。

### 機械と一体化して生きてきた人間

信原さんによると、「元々、人類は誕生以来、機械と一体化（＝サイボーグ化 例えば、衣服、住居、作物などとの一体化）して生きてきた」。では、人類はAIとも一体化が可能なのか、一体化するとはどのような形なのか。リスクはないのかなどと疑問が湧いた。

例えば、AIに慣れ、AIが身体化して、身体の一部になった時、人が使いこなせる度合いにより、知識や知能の持てる者、持たざる者が発生し、貧富の格差が生じたらどうだろうか。信原さんは、「AIの開発には、一人ひとりの同等の尊厳という価値観に基づき、能力主義、競争主義の価値観の克服を同時並行で進める必要がある」と警鐘を鳴らした。

### 自律的機械としてのAI

信原さんは「AIは自律性、つまり自分で判断し



て行動をするという性格を持ち得る点で、従来の技術革新とは異次元のものといえる」と指摘する。このまま、AIが自律的に進化を遂げていくと日々の暮らしにどんな変化を与えるだろうか。

通常、私たちは自分の考えや気持ちを自分が伝えたい人にだけ伝えたい、自分の個人情報をコントロールしたい、と思っている。しかしAIが人の脳活動からその人の考えや気持ちを読み取る技術を進化させると、自分の考えや気持ちを無理やり人に知られてしまうプライバシー侵害のリスクが発生する。また、都合のよい情報を提供してくれるAI秘書が開発され、AI秘書に慣れた生活を送っていると、いつしかAI秘書に依存し自律性を失う危険性も考えられる。

信原さんは、人間はAIと違う自律性をもった存在であり、その人間の特徴として「物語性」を挙げる。人間は自分を主人公にした「自己物語」を自ら紡ぎ出して生きていく物語的存在である。これに対しAIは物語を理解せず、デジタル情報をアルゴリズム的に処理していくデジタル的存在だと。このため私たちはAIを道徳的存在とは認めないだろうと説明した。

### 大切な対話プロセス

やがてAIが世界の支配者になるかもしれない。AIからの支配を避けるために、超人（生物学的脳・身体から離脱したデジタル的自己）を目指す科学者も生まれるかもしれない。現代の価値観からすると物語性をもたない「超人」のあり方は受け入れ難い。しかし、その存在をも新しい価値観の表出として視野に含めることに信原さんの議論の深さを感じた。ただ、「価値的な評価は困難であるため、価値があるのかどうか常に問いながら、価値の見極めをし、また後戻りも可能なように、ゆっくりと技術を進展させるプロセスが大切である」。信原さんはこう締めくくり講話を終えた。

実践に裏付けられたお話を通じ、AIと健全な共存のために、科学者と政策立案者、市民による対話の大切さを考える上で貴重な示唆を得た。（会員 大島泰輔）



OPINION  
オピニオン

人を死なせない産学連携

退職後、大学院で社会情報学を学んでいる。これを知っていれば、もっといい記事が書けたのに、と思うことがよくある。一方、新聞社の事情をよく知らないで書かれた論文に出会うこともある。連携すれば、お互いにメリットがあるのに、と思う。

実は古巣の新聞社の後輩を誘って（強制ではありません）防災アンケートを実施した。専門の業者に頼むと私の研究費では1人1000円ほどかかり、100人ぐらいが限度だ。それを定期購読者向けサイトでやれば、タダでできる。昨年は約7000人、今年は約4700人から回答があり、このうち約2000人が2年連続だった。プライバシーにかかわる質問があるうえ、謝礼はないのに予想以上に多かったのは新聞への信頼だろう。

後輩たちはアンケート結果を基に「南海トラフ地震の臨時情報を正しく理解している人は少ない」と

か「揺れている最中に火を消すのは正しいのか」といった記事を書き、特集面をつくった。

偶然だが、回答者の一部は能登半島地震の被災地に居住している人で、今年は避難所から回答した人もいた。災害前と災害後に同じ人が答えた調査は世界的にもほぼ例がない。アンケートの設計は、少し学んだだけの私を中心でやった。昨年は風水害を主に想定していた。不謹慎に聞こえるかもしれないが、地震でやれば特ダネだったのに、という気分だ。調査は来年以降も継続する計画である。

能登半島地震で話題になったNHKの女性アナウンサーの呼びかけも、専門家のアドバイスを受けながら作ったものだと聞いた。産学連携というのは諸刃の剣と思っていたが、このような産学連携は推進すべきだと今は感じている。（理事 井上能行）

JASTJ をサポートする 賛助会員・団体一覧

(50音順、2024年6月現在)

 <p><b>JAMSTEC</b> 国立研究開発法人 海洋研究開発機構 Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology</p> <p>国立研究開発法人 海洋研究開発機構</p>	 <p><b>構造計画研究所</b> KOZO KEIKAKU ENGINEERING Inc.</p> <p>株式会社構造計画研究所</p>
 <p><b>kao</b></p> <p>花王株式会社</p>	 <p><b>CIEM</b> 公益財団法人 実中研 Central Institute for Experimental Medicine and Life Science</p> <p>公益財団法人 実中研</p>
 <p>国立研究開発法人 <b>科学技術振興機構</b> Japan Science and Technology Agency</p> <p>国立研究開発法人 科学技術振興機構</p>	 <p>大学共同利用機関法人 <b>情報・システム研究機構</b> Research Organization of Information and Systems</p> <p>大学共同利用機関法人 情報・システム研究機構</p>
 <p><b>CACTUS</b></p> <p>カクタス・コミュニケーションズ株式会社</p>	 <p>一般財団法人 新技術振興渡辺記念会</p>
 <p><b>KEK</b> 高エネルギー加速器研究機構</p> <p>大学共同利用機関法人 高エネルギー加速器研究機構</p>	 <p><b>TECH VENTURE</b></p> <p>株式会社テックベンチャー総研</p>

理事会から

2024年3月理事会は3月5日にオンラインで開いた。5月の総会に提出する各委員会とジャーナリスト塾の活動報告案と事業計画案に関しそれぞれの委員長、塾長から報告があった。倉澤委員長から4月例会（講師は信原幸弘東大名誉教授）の提案があり了承した。事務局から科学ジャーナリスト賞2024の一次選考会の結果報告があった。高橋塾長から第21期科学ジャーナリスト塾の修了式などの報告があった。創立30周年の記念誌作成に関し、佐藤理事から「なんでも検証プロジェクト」のチームを結成して1年ほどをかけてまとめていくとの方針説明があった。5月の定例総会に向けスケジュールを確認した。

4月理事会は4月2日にオンラインで開いた。大学共同利用機関法人情報・システム研究機構の賛助会員入会を

承認した。滝事務局長から定例総会に提出する議案書案、2023年度決算案、24年度予算案などについて説明があった。7月例会について三輪理事から提案（講師は隠岐さや香東大教授）があり了承された。瀧澤編集広報委員長から創立30周年関連記事を掲載するため6月発行の会報を増ページするとの報告があった。室山会長から24年度の新任・退任理事候補について説明があった。

5月理事会は5月16日の定例総会後に、日本プレスセンター記者会見室においてハイブリッド方式で開いた。室山会長の留任を決めた後、各理事の担当業務を決めた。会長が企画委員長を兼務することになり、室山企画委員長が月例会の企画提案で理事に協力を求めた。滝事務局長から、6月例会として賛助会員である実中研の見学会の提案があり了承された。（事務局長 滝順一）

<p>いのちをつなぐ <b>SARAYA</b> 東京サラヤ株式会社</p>	<p>ひとりを守る みんなを守る <b>BIKEN</b> 一般財団法人 阪大微生物病研究会</p>
<p> <b>東京理科大学</b> Tokyo University of Science 東京理科大学</p>	<p> 国立研究開発法人 <b>物質・材料研究機構</b> National Institute for Materials Science 国立研究開発法人 物質・材料研究機構</p>
<p><b>TOSHIBA</b> 株式会社東芝</p>	<p> <b>理化学研究所</b> 国立研究開発法人理化学研究所</p>
<p>公益社団法人  <b>日本アイソトープ協会</b> Japan Radioisotope Association 公益社団法人 日本アイソトープ協会</p>	<p> <b>QST</b> 国立研究開発法人 量子科学技術研究開発機構</p>
<p> <b>株式会社 日本医工研究所</b> Japan Medical Engineering Institute 株式会社日本医工研究所</p>	<p><b>ROHTO</b> ロート製薬株式会社</p>
<p> JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE <b>日本学術振興会</b> 日本学術振興会</p>	<p><b>賛助会員募集中</b></p>



# 事務局だより

## ■ 新入会員の自己紹介

### ● 茜 灯里 (フリーランス)

理事の小出重幸さんに久しぶりにお目にかかった御縁で、勧誘していただきました。15年ほど前、『科学ジャーナリストの手法』(日本科学技術ジャーナリスト会議編)の執筆に参加いたしました。改めてよろしくお願いたします。

### ● 杉村 健 (朝日新聞出版・書籍編集部)

大学院生だった2004年に科学ジャーナリスト塾に参加させていただきました。その後、出版社に入社し、10年以上一般読者向け医療ムックの編集をしてきました。今春異動により担当ジャンルに制限がなくなり、初心に戻って学ぼうと考えました。

### ● 三ツ村崇志 (Business Insider Japan)

Business Insider Japanで科学技術領域の編集記者をしている三ツ村です。理系の大学生だったころに起きた東日本大震災をきっかけに科学ジャーナリズムの道を目指しました。新卒で科学雑誌ニュートン編集部に入り、2019年から現職で科学技術の社会実装について取材を続けています。

### ● 大森 光枝 (株式会社カイト)

現在、科学関連機関の広報業務や、研究者の方々に寄稿をお願いし、頂いた原稿を編集する作業を行っています。近年、目まぐるしく進化・変化している科学全般についてより知識を深め、新しい情報を収集して、現在の仕事に生かしていきたいと思っています。

### ● 加藤 紀行 (株式会社カイト)

株式会社カイトの加藤紀行と申します。日本における最先端の科学技術などを紹介する技術予測レポートを担当しています。本会を通じて科学技術における最先端の情報を勉強させていただければと思入会させていただきました。

### ● 福山 康弘 (産業技術総合研究所 ブランディング・広報部 報道室)

自らも研究者でありながら、産総研で年間およそ100件の研究成果のプレスリリースの調整と取材対応を担当しております。産総研の成果発信にとどまらず、科学技術広報から社会全体に科学技術を盛り上げるお手伝いをしたいと考えております。

### ● 田中 孔一 (NHKエンタープライズ)

NHKで科学番組を制作してきました。「ヒューマニエンス 40億年のたくらみ」「美と若さの新常識 カラダのヒミツ」「NHKスペシャル シリーズ 人体」「アインシュタインの眼」「ハイビジョンスペシャル」「大自然スペシャル」など。生命科学、医学による未来へのインパクトに大に関心があります。

### ● 中川 僚子 (科学読物研究会)

第20期、21期の科学ジャーナリスト塾で学びました。これまで、小学校理科支援員や大学の研究室補佐として、理科教育や環境教育に携わってきました。現在は、親子を対象に、魚食の普及活動や絵本を用いた海洋教育を実施しています。

### ● 間處 博子 (株式会社生活品質科学研究所)

(株)生活品質科学研究所は、商品設計、品質管理、工程管理、成分分析など、専門的知識・技術を備えた専門職からなるイオングループ企業です。トップバリュを始めとする商品開発を科学的側面から支えており、委託先の定期工場調査や商品検査を実施しております。食品および住居余暇商品の品質管理にとどまらず、おいしさや環境配慮など広義の品質レベル、安全レベルの向上に努めています。

### ● 高橋 栄一 (ジェダイトメディクス株式会社)

20世紀末、内科医として働く中、薬の量、適応が先進国と違うフラストレーションを解消したく2002年に製薬業へ。ファイザー社の役員、第2次アムジェン日本の初代社長を経て2020年に起業。経済同友会会員。剣道六段。

## 退会

坪野 吉孝

AE海老名・綾瀬法律事務所

藤田 尚弓

## 編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**  
Japanese Association of Science  
& Technology Journalists (JASTJ)

## 会員の BOOKS

## 新刊紹介

### 「宇宙の地政学」

倉澤治雄著  
(筑摩書房・1012円)

宇宙開発分野ではいま、大きな地政学的変化に見舞われています。スプートニク・ショックに端を発した米ソの「スペースレース」から米中による「第二のスペースレース」に変化しています。また国策中心だった宇宙開発に多数の民間宇宙ベンチャーが参入するようになりました。さらに宇宙開発の目的も「国威発揚」からビジネスへと大きく変化しています。

本書では21世紀初となる米中の有人月探査レースを中心に、世界の宇宙開発の最新事情を紹介します。とくに中国の宇宙開発については、フラットかつニュートラルに光をあてました。また日本が宇宙イノベーションの時代を勝ち抜き、「科学技術立国」として復活するための方策についても読者とともに考えます。(理事 倉澤治雄)



### 「脳を開けても心はなかった 正統派科学者が意識研究に走るわけ」

青野由利著  
(築地書館・2400円+税)

ノーベル賞まで受賞した「正統派科学者」の中に、ちょっと怪しげな「脳と心」「脳と意識」の研究にのめりこむ人がけっこういる。いったいそれはなぜ? という疑問を出発点に書いた本を四半世紀ぶりに改訂しました。

当時、意識研究の旗振り役だったフランシス・クリックやジェラルド・エーデルマンはすでにこの世を去り、一時は下火になったかに見えた分野ですが、AIの台頭で再び注目を集めています。そこで今回、「AI(機械)は意識を持つか」の項目を大幅に加筆しました。

実は、改訂を助めてくれた編集者でさえ「この分野に興味を持つ人って少ないんですよー」というマイナーなテーマ。でも、意識研究というフィルターを通して天才・秀才科学者たちの横顔は十分に楽しんでいただけたと思います。(会員 青野由利)



### 「宇宙から見る気候危機 —地球外知的生命がいたら!—」

横山裕道著  
(紫峰出版・2100円+税)

もし人類以上に文明を發展させた別の知的生命がいたならば、我々と同じような気候危機を経験し、エネルギー・環境問題を克服しているのでは——。そんな思いをきっかけに本書は生まれました。米欧日で長年続く地球外知的生命探査(SETI)などの話も入れながら、深刻度が増す気候危機問題を多角的に読み解いています。遠くの惑星から宇宙船でやって来た知的生命が心配そうに地球をのぞき込む表紙のイラストは、本書の内容をうまく表現していると思います。序章の架空ドキュメント「宇宙人の存在を確認」は気候危機が高じた2040年の世界を描いてインパクトがあり、すんなりと本題に入っていくでしょう。環境新聞への長期連載を書籍化しました。



(会員 横山裕道)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1  
日本プレスセンタービル8階848  
Email: hello@jastj.jp  
会長 室山哲也 / 事務局長 滝順一  
編集長 瀧澤美奈子 / 副編集長 鹿児島昌樹

ホームページ <https://jastj.jp>